

## 第62回和歌山県皮膚科医会学術講演会

### 特別講演抄録

演題：日々の診療にもう一手 ～皮膚科診療は漢方に向いている～

演者：田中まり

漢方に興味はあるけれど、まだあまり使っていない先生方に、本日の話が使うきっかけになれば幸いです。

日常診療で、西洋薬で治る患者さんは問題ありません。しかし、治療に難渋する場合、漢方を用いて治療効果が上がれば患者さんの役に立ちます。

おおまかな表現ですが、漢方では、過不足や滞りのないバランスのとれた真ん中「中庸」が良い状態、病気はここからずれてしまった状態、治療でこれを中庸に戻してあげるとイメージすると分かりやすいです。西洋医学でも、電解質や体温脈拍などに、ホメオスタシスで維持されるちょうど良い状態があるのと同じです。処方をおおまかに大きく間違えないために、虚実、寒熱、燥湿、まずこの3軸を意識すると思います。

殆どの西洋薬はevidence based medicineですが、漢方薬は違う意味のEBM：experience based medicineです。現在の方剤は、長年の淘汰によって残ったもので、生薬のいわば黄金比といえます。

同一病名でも方剤が複数あり、患者さんによって使い分ける（同病異治）のが分かりにくいと聞きます。しかし考えてみれば西洋医学も同じで、一つの疾患に対していつでも同じ処方をすることはありません。特に皮膚科医は、日々の診察で、乾燥や湿潤、炎症の深さなどの違いを見極めて、薬剤を使い分けています。ですから漢方診療にも向いていると思います。

#### 1) 使いやすい漢方薬を1つ

お薦めの方剤として、十味敗毒湯があります。これは炎症・化膿傾向を持つ皮疹の初期に幅広く使える良さがあります。尋常性痤瘡治療ガイドラインで十味敗毒湯は推奨度C1で推奨されており、従来治療では改善がみられない難治性痤瘡への短期間高用量投与の有効性も報告されています。アトピー性皮膚炎の急性皮疹や蕁麻疹、そのほかの皮膚疾患の初期として紅斑の酒さにも有効性の報告があります。湿疹の治療中、ステロイドで毛包炎を併発することがありますが、十味敗毒湯は両者に有用です。

もう一つお薦めは、抑肝散加陳皮半夏です。この方剤は、神経症、不眠症に適応がありますが、痒みでイライラする／眠れない様な方に効果があり、抗アレルギー剤が増量困難な場合にも追加できる利点があります。

## 2) 漢方を使うとよい疾患

私がよく漢方を処方する疾患は酒さです。問診や舌診は、短時間でその人のおおまかな状態が判断できて方剤の選択に有用です。問診では冷え・月経・便秘などについて尋ねます。さらに舌診で、寒熱の程度や水滞・お血などをみて方剤を考えると、患者さんの状態により適した処方を選べるので、治療効果が上がり皮膚以外の症状も改善することがあります。

## 3) 副作用に気をつけて

偽アルドステロン症・肝機能障害・間質性肺炎・腸間膜静脈硬化症などが挙げられます。偽アルドステロン症の原因となる甘草は、殆どの方剤に入っていますので、むくみ・脱力感・筋肉痛・こわばりなどに注意するよう、患者さんへの説明が大事です。また、肝機能障害は比較的頻度が高いので、定期的な血液検査をお勧めします。

追記：

質疑応答の時に具体的にお答えできませんでした、小児の内服について

厚生労働省の「一般用漢方処方の手引き」

2歳未満：成人用量の1/4以下      2歳以上4歳未満：成人容量の1/3

4歳以上7歳未満：成人用量の1/2      7歳以上15歳未満：成人容量の2/3

また、小児科領域での換算量から算出された乳幼児の投薬量として

3カ月：1/6      6カ月：1/5      1歳：1/4

3歳：1/3      7.5歳：1/2      12歳：2/3

これに体格で加減をして用いるとよいと思います。